

## 蜻蛉日記は魅力的

内藤 真理子

新聞の記事で、島内景二著『王朝日記の魅力』が紹介されていた。王朝日記の中の蜻蛉日記は、以前、中巻に登場する源高明が、光源氏のモデルの一人とされていると聞いたので、光源氏ファンとしては読んだことがあった。

高明は天皇の皇子として生まれながら、皇族を離れて源という苗字を賜った。同じじゃない！

光源氏は失脚して須磨に流されたが、高明も失脚して大宰府に流されている。なるほど！

源高明が、光の君のような光り輝く美男子だったかどうかはわからないが、どうして失脚したのだろう。

蜻蛉日記の作者が三十四歳の時に「安和の変」という政変が起きた。これは藤原氏が、藤原以外の者を排斥して摂関政治を完成させようと図ったもので、左大臣の源高明は、天皇との外戚関係があり権力を握る可能性がある為、無実の罪を着せられたのだ。

蜻蛉日記の作者の夫は、後に藤原氏の最高権力者となる、藤原兼家であり、排斥した側の人間なのだが、作者は、作家としてこの時代に生きた一人の女性として、被害者やその妻の義憤、又、子を持つ母として、悲しみ、苦しみに同情し、心のこもった文学的な長歌のやり取りも書いている。

この事件は政治の世界のことではあるが、彼女の溢れる気持ちを日記の形で書き残しているので、時代背景もわかって魅力溢れるものだと思う。

何と言っても、平安時代の上流階級の夫人の暮らしぶりを書いた日記は、ミ―ハーの私には魅力的だった。

夫の兼家がしばらく通ってこない、歌のやり取りをしながら怒りを露わにする。夫は宮中で何か行事があると、妻にその衣類を縫ってくれるように頼むのだが、作者は、腹を立てていると、平気で知らんぷりをする。こんなやり取りを読んで王朝貴族の生活の一端にびっくり。

又、息子の道綱が十六歳で宮中行事の「のりゆみ賭弓」で弓手に選ばれると、家庭教師をつけて特訓し、見事、帝の前で勝つと、その喜ぶ様！ 今も昔も変わらない親バカぶりでありました。